はくぶつかんの部屋 22

～秋の企画展「宜野湾のムラアシビ」によせて～

宜野湾市の野嵩・新城・普天間には、数年毎にムラアシビ（村遊び）が行われます。ムラアシビとは、村芝居とも言い、ムラの神に農作物の豊作を感謝してもてなし、翌年の豊作も願う行事でした。ムラ人が歌や踊りを披露して、感謝の気持ちを表すと共に、農作物の収穫を終えたムラ人の慰労の意味もありました。こうした行事は、沖縄各地でみられ、生活スタイルが変わった今日においても伝統行事、芸能として受け継がれています。

野嵩では、野嵩1区自治会が主体となって子・午年に、新城は新城郷友会と同区自治会によって寅・申年に、普天間は普天間郷友会主催で丑・巳・酉年の5年周期で行われています。数年毎に開催されることから〝マールアシビ（廻る遊び）〟とも呼んでいます。上演される演目数も17～25と多く、3時間に及びます。会場は、普天間ではホールを借りて総会と合わせて行いますが、野嵩と新城では区内の広場に〝バンク〟と言う仮設舞台を設営して演じます。代表する演目には、野嵩では組踊「忠臣護佐丸」、歌劇「真玉橋由来記」、新城では「総踊り」、普天間では「獅子舞」が挙げられます。

ムラアシビのほとんどの出演者が素人で数か月かけて稽古に励み、本番にはとても素人とは思えないほどの演技に感動します。また、観客側では身内や知人の出演とあって楽しみあり、ハラハラありの見学です。このような役者と観客が一体となることと、上演を裏方として支える方々によって生み出される地域のパワーには醍醐味があり、感動を覚えます。

市立博物館では、この秋の企画展で「宜野湾のムラアシビ」を開催します。市内のマールアシビを行う野嵩・新城・普天間を中心に実物資料や写真など、ムラアシビの醍醐味を紹介します。ぜひ、ご覧ください。

▲野嵩マールアシビの道ジュネー（2014年）

秋の企画展「宜野湾のムラアシビ」
10月29日（水）～11月30日（日）
入場無料
【問合せ】市立博物館　☎870-9317

茶ぐぁーゆんたく 126

軽便鉄道と宜野湾の駅

10月14日は「鉄道の日」となっています。沖縄においては、2003（平成15）年の「沖縄都市モノレール」開通が、記憶に新しいところです。

戦前には、1914（大正3）年から1945（昭和20）年までのおよそ30年間、沖縄本島に鉄道が走っており、宜野湾村にも駅がありました。

鉄道の名称は「沖縄県営鉄道」で、県民に「ケイビン」と呼ばれ、与那原線、嘉手納線、糸満線等が運行していました。そのうち、宜野湾村に運行したのは嘉手納線で、那覇の古波蔵駅を起点に北谷村の嘉手納駅まで続いていました。

宜野湾村内には当初、大山駅と大謝名駅の2駅しかありませんでしたが、1923（大正12）年2月26日に真志喜駅が設置され、3駅となりました。

その中で一番大きいのは大山駅で、多くの住民が利用していました。大山駅は特に貨物の発送が多く、中でもサトウキビの輸送が主でした。戦前の宜野湾村は豊かな農村地域で、サトウキビ畑が広がっていたため、嘉手納の製糖工場まで運搬する必要があったのです。大山駅にはトロッコ軌道の引込み線が敷設されており、サトウキビの積み込みを助けていました。また、大謝名駅は我如古・嘉数あたりの人が、多く利用していました。真志喜駅は当初は無人駅でしたが、旅客・貨物の便宜をはかるために待合所が設置されたことで、便利になったといいます。

地域住民に広く利用された軽便鉄道ですが、1944（昭和19）年10月10日の大空襲以降は軍事物質輸送に変わり、その後は戦火の中に消えていきました。

真志喜の市立博物館には、当時の軽便鉄道の車輪が展示されています。ご覧いただき、かつての軽便鉄道の姿を想像してみてはいかがでしょうか。

▲市立博物館に展示されている軽便鉄道の車輪

『宜野湾市史』への問合せ
文化課 市史編集係（市立博物館内）
☎870－9317